

要旨

資料翻刻「^{がっきるいとめ}楽器類留」続 弾きもの

たかき ふみ え
高木 文恵
わたなべ こういち
渡辺 恒一

当館所蔵の彦根藩井伊家伝来の雅楽器群は、ほとんどの種類を網羅し、その数は260点余り、関連資料や楽譜などを含めると600点以上の多数にのぼり、平安・鎌倉時代に遡る古器も含む、質量ともに日本有数の雅楽器コレクションとして知られている。

これらは、そのほとんどが井伊家12代当主の井伊直亮(1794-1850)により収集されたもので、直亮は、自ら詳細な目録「^{がっきるいとめ}楽器類留」を作成している。この「楽器類留」については、『彦根城博物館研究紀要』第7号(1996年)および第10号(1999年)において、「吹きもの」(管楽器)と「打ちもの」(打楽器)を所収する冊を翻刻(古文書のくずし字を活字に直すこと)して紹介した。この翻刻当時、「弾きもの」(絃楽器)の目録は別に作成されていたことは窺えるものの、伝存していないと認識されていた。しかし後に、ひどく傷んでいたために文書番号が付されていなかった一群の古文書類の中にその存在が確認でき、平成22年度から同23年度にかけて、国宝重要文化財等保存整備費補助金(文化庁)の交付を受けて保存修理を実施し、晴れて内容を確認することができるようになった。今回翻刻したのは、この修理が叶った、「弾きもの」所載の「楽器類留」である(*1)。この冊には、^{そう}箏、^{わごん}和琴、^{しちげんきん}七絃琴、^び琵琶など119件の絃楽器が記されている(ただし一部重複の可能性あり)。「楽器類留」の記述は、楽器の名称、数量、位付け、銘文、作成年代、素材、装飾、附属品、伝来、入手時期、入手元、取次者、金額、譲り状等の附属文書の写し等、実に詳細である。

本翻刻により、既に翻刻された「吹きもの」および「打ちもの」(計190件)と併せ、井伊家伝来雅楽器コレクションの全容が明らかとなったことになる。今後、雅楽の研究や大名のコレクションの研究等に資する基礎資料となり得るものと考えられる。

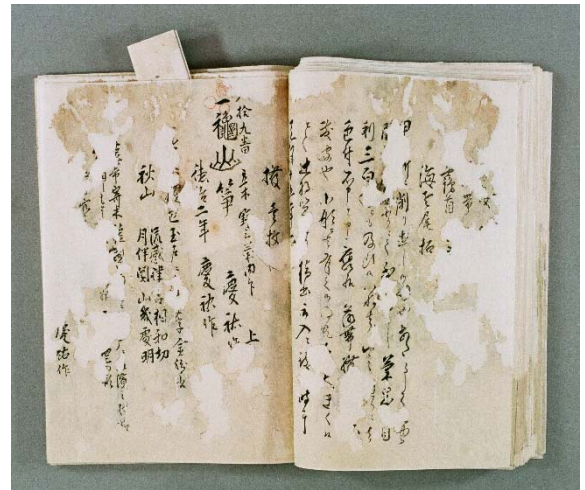
*1 欠失部分が多いため、現存する楽器の銘文、附属文書、箱書など、「楽器類留」を作成するにあたり、もととなったと考えられる資料をもとに欠損部分の文字を補った。加えて、明治時代の早い段階で「楽器類留」をもとに井伊家で作成されたと見られる目録3点(いずれも井伊家伝来古文書、当館蔵)により補った。



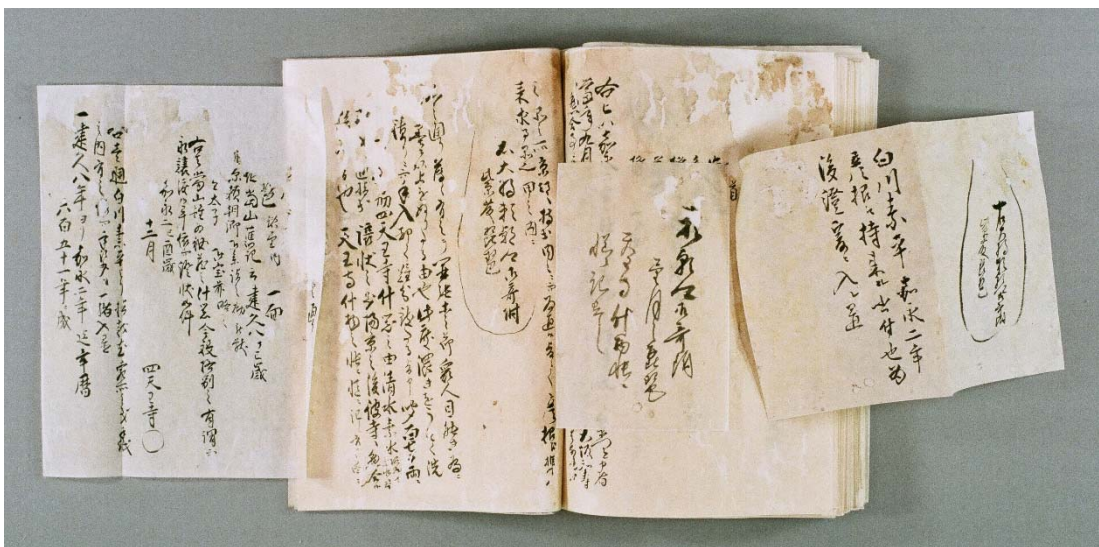
①「楽器類留」弾きもの 修理前



②「楽器類留」弾きもの 修理後(1)



③「楽器類留」弾きもの 修理後(2)



④「楽器類留」弾きもの 修理後(3)

要旨

資料翻刻 五十嵐半次家文書中の大坂の陣関係史料

はやかわ しゅんじ
早川 駿治

本稿は、五十嵐半次家文書の中から、大坂の陣関係の史料について、翻刻(古文書のくずし字を活字に直すこと)してその内容を紹介するものである。五十嵐半次家文書は、彦根藩士五十嵐半次家のご子孫に伝わった古文書で、令和元年度に彦根城博物館で寄贈を受けた。五十嵐半次家の初代五十嵐半次、その弟五十嵐軍平は、井伊直孝(1590-1659)に従って大坂の陣に出陣した。

五十嵐半次家文書には、後代に写したのものもあるが、大坂の陣における彼らの戦功を記した五十嵐半次口上書、小幡与五兵衛口上書や、豊臣方の井島太郎左衛門から送られた書状、二代目の五十嵐半次による書置が含まれている。当時の状況が窺えるほか、写しには書き写した経緯も記しているものがあり、江戸時代の由緒をめぐる情報収集活動の一端も垣間見える。

また、明治になると、旧彦根藩士の石黒務や中村不能齋が五十嵐家の文書を見て考証を加えており、それに関係する文書も五十嵐半次家文書に残されている。明治期の歴史研究活動の様子も見えてくる。

以上のとおり、五十嵐半次・軍平の大坂の陣における活動について、さまざまな側面から捉えることができる史料である。

○井島太郎左衛門書状 五十嵐軍平宛 (慶長20年(1615)正月2日、本稿【1】の史料)

豊臣方真田幸村が立て籠もる大坂城の出丸に徳川方が攻撃を仕掛けた真田丸攻め(冬の陣、慶長19年(1614)12月4日)に関係して、豊臣方の井島太郎左衛門から五十嵐軍平に書状が送られた。それによると、真田丸攻めの際に、井島が射かけた矢が五十嵐軍平に少しかすり、軍平はその矢を井島に送り返したという。井島は武士の冥加として喜び、後日軍平に送った返状がこの史料である。

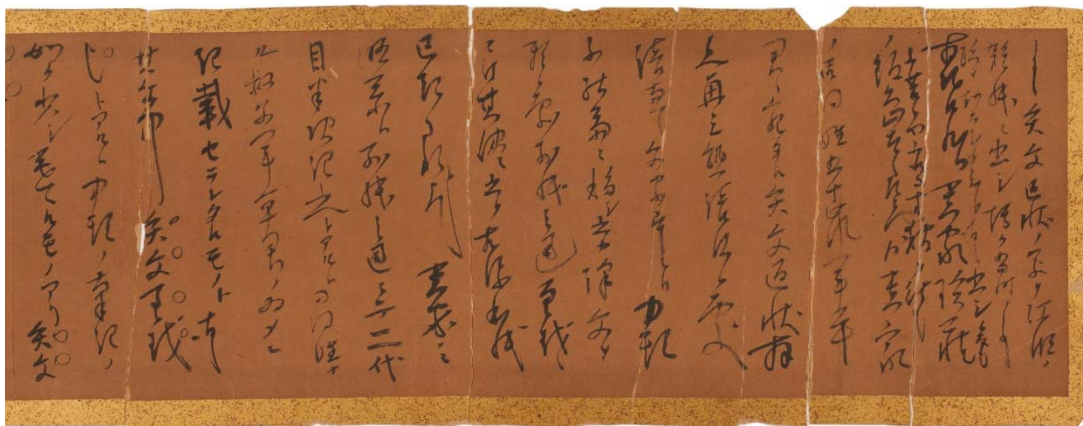


井島太郎左衛門書状 五十嵐軍平宛(前半)

○石黒務書簡 五十嵐伝次郎宛 (明治24年(1891)9月11日、本稿【9】の史料)

旧彦根藩士の石黒務は、五十嵐半次家の10代目五十嵐伝次郎から井島太郎左衛門書状を借用した。熟読するも読み兼ねる文字があり、同じく旧彦根藩士で歴史学者でもあった中村不能齋に訳文を依頼し、訳文・解説を入手した。それを五十嵐伝次郎に送るとともに、井島太郎左衛門書状は五十嵐家の重宝であるから卷子に仕立て桐の箱に入れて永く保存するように勧めている。

東京大学史料編纂所で作成している『大日本史料』(東京大学出版会)という日本史学では有名な史料集に、井島太郎左衛門書状が翻刻掲載されている。これは、石黒務から訳文を依頼された中村不能齋が井島太郎左衛門書状の記録を手元に残し、その記録が彼の甥(養子関係上では孫)で史料編纂官を務めた中村勝麻呂を経て、東京大学史料編纂所に収蔵されたことによるものと考えられる。



石黒務書簡 五十嵐伝次郎宛(前半)